

笑い と 鎮魂 の 詩 学

paradiso terretre と *tragic joy*

真鍋晶子

本発表は、Ezra Pound と William Butler Yeats の詩学と作品に能楽が見せた影響を、特に Pound が書いた「狂言」*The Protagonist* とそのライフワーク *The Cantos* に見るものである。事前に提出したタイトルと発表した内容にかなりの差が生じたため、以下の内容とタイトルが齟齬を来していることをお詫びしておきたい。

能楽は、Pound と Yeats の理想とする演劇原理を実践するものであった。自分たちの作った芸術を味わうことができる理想の観客が、微妙な声の機微や所作を感じ取ることでできる距離で空間を共有する intimate な舞台。そのためには観客数も限られる。しかも、その舞台は装置がほぼ何もない空間で、特殊な照明も音響効果もないため、観客は役者の言葉、所作に集中し、想像力を最大限に発揮することになる。Yeats が能との邂逅で最初に書いた *At the Hawk's Well* (以下、*AHW*) は any bare space before a wall で演じるよう指定され、1916 年日常的な光の下、邸宅の「親密な」居間で、50 名程の観客を前に初演された。「面」、伝統が体に受け継がれた「型」、五番立の番組構成など、伝統を重んじる formalists の二人を魅了した特徴によって、俗な日常からの「距離」が生まれ、それゆえに不可思議な出来事や精巧に練り上げられた言葉が「親密」に感じられる。同時に、日常の光の中で異なる世界が表現されるからこそ、際立つ不思議さが、見る人の心の核心に突き刺さるのだ。

AHW 初演時、Pound は、アイルランドの神話時代の英雄クフーリンを扱うこの serious な劇を「能」と見立て、自分は現代アイルランドの民衆を「主人公」とする「狂言」を書き、公演したいと考えた。Pound 作の「狂言」*The Protagonist* の同時上演は実現せず、その後、Yeats はアベイ劇場での上演を進めたが、「不適切」と却下された。本作は Yeats が「狂言」として書いた *The Cat and the Moon* の完成度には及ばないものの、狂言の本質を捉えている。本作品の狂言との相関性、また、ここで用いられた様式のさらなる発展と成功を *The Cantos* における「能」に読み取る。

The Protagonist は二人の警官が、囚人を刑務所に連れてくるところから始まる。警官は、囚人の罪状を知らず、上司に言われたまま業務を遂行しているのみである。冒頭から無名の民による警官批判が展開し、民衆の批判精神を謳歌する狂言を彷彿とさせる。本作の全ての登場人物が民衆で、しかも警察側以外は、ほぼ全員 Young Boy, Young Girl など匿名である。能の主人公が、よく知られた英雄、神、古典の登場人物であるのに対し、狂言の登場人物の多くは太郎冠者、女どもと無名の民であり、観客の誰でもありうる人物を代弁するのと共通している。警官もアイルランドの民だが、無名の民にとっては王立アイルランド警察隊に属すダブリン城・英国に直属している者である。批判の中に、イースター蜂起の首謀者への英国の拙速で不条理な死刑に対する批判、アメリカ移民に関わる風刺と、アイルランドの状況が辛辣に、かつ面白可笑しく散りばめられる。次々に人が集まり、堂々とした体躯で、威厳を持って思慮深げな沈黙を保ち続ける囚人について憶測にみちた会話が交わされる。囚人を一種神話化する衆愚。警察のみならず、無名の人々も含む舞台にいる全ての民、すなわち、アイルランド民衆全ての「無知」が批判の対象となっている。最後には、囚人のちっぽけな罪状が露にされ、その囚人は口を開くと「無知」の権化のような人物で、身も蓋もない。(本作品ように最初から最後まで舞台上にしながら、終始沈黙し、最後に決定的なアンチクライマックスを吐露する登場人物類型は、狂言にはないが、『二九十八』『吹取』『釣針』のように、女が隠し続けた顔が最後に露わになると醜女で、男たちが逃げるといふ、妄想で理想を作り上げ、最後に現実が露わになり、アンチクライマックス的笑いで終わる演目が類似する。)ただし、Pound も Yeats も高貴な民に対する理想は持っていたことを忘れてはならない。そもそも、アベイ劇場はアイルランドの人々の心を鼓舞する演劇の上演という理想に基づき創立されたものである。また、能楽との出逢いで生まれた自作の劇を、古代の先住民や聖パトリックゆかりの地で演じて、古代の記憶を蘇らせたいとの夢を持っていた Yeats は、この古代の記憶や知恵が理想の民に流れているとの信念を持っていた。

アイルランドの無知を炙り出す以上のような内容こそ、アベイ劇場が本作品を不適切とした理由の一つであると思われる。当時は、今ではアイルランドの誇りとなっている James Joyce の作品も、アイルランドを貶めたと見なされた時代であるのだから。今一つは言語である。口語の Hiberno-English を多用、その音が確実に現れる表記をすることで、現状を鮮明に再現するよう試みられている。狂言の言葉は、能に比べ、散文的で、日常会話的、リズムカルなテンポのいい掛け合いの妙が楽しめる。そこに通ずるのだが、本作品では「無知」を表すために用いられているため、アイルランド英語が下品と捉えられかねない卑俗さを漂わせている。さらに、公の舞台には相応しくない罵り言葉が多用される。

しかし、この「声の再現」に、言葉の「音」の持つ意義を発揮させる Pound の独自性が見られる。言葉を発せられるままに転写し、多声の共存する世界を生み出し、その全てを受け入れハーモニーを生み出す。これは、現実をそのまま受け入れて謳歌する狂言の原理の実践である。ただし、Pound や Yeats が嫌ったリアリズム劇から離れ、感傷を掻き立てない枠組みを構築する目指した舞台は対象を客観化する距離を必要とする。さらに喜劇は「笑い」を卑俗なものにしない「距離」が求められる。しかし、この「生の声の再現」という言葉の提示方法は、直截的に成りかねない境界線上にある。

この「声の再現」が、*The Cantos*、特に Pound の絶唱である *The Pisan Cantos* において、絶妙の効果を生んでいる。例えば、Pound が 1913 年から 3 冬 Stone Cottage で秘書として Yeats と過ごした時のことが Canto 83 で回想される。1945 年ピサのアメリカ軍の Disciplinary Training Center に囚われの身だった Pound に、朝靄の山からの日の出が日本の「掛け軸」(Kakamono) のように見えたことをきっかけに、能を英訳し Yeats に聞かせていた頃を思い出す。収容所という苦境の中で自然の美に誘われて満ち足りた日々が蘇る。詩 “The Peacock” を創作する Yeats のアイルランドアクセントの英語の「声」が再現される。“The Peacock”は、ダブリン郊外の荒涼とした Three Rock を背景としている。風に曝された灰色の岩地は *AHW* の背景に酷似し、また能舞台のような「何もない」空間である。そこにいる詩人の真髓 (ghost) は gay であると、Yeats が晩年発展させる tragic joy の本質に触れる一語が示され、Pound の当時の状況にも重なる者である。このような Pound の個人的経験に基づく Yeats の Irish brogue から能の謡に至る古今東西の「声」を、生のまま並置することで Pound の魂の声の叫びが表される。自らのものではない声が、距離と異化効果を生みながらも、個人の感情が強烈に吐露される。この点に注目し、*The Cantos* の中の能を検討する。

晩年まで実際の能楽公演に接することのなかった Pound の能楽理解の深さに驚かされるが、関東大震災で 30 歳にして亡くなった画家久米民十郎の友情と指導が大きかった。久米の実家には能舞台があり、狂言の稽古をする幼い久米の写真や、儀式的な『翁』の中で狂言師が演じ異界との交流・呪術的要素をもつ『三番三(叟)』「鈴の段」を描いた金屏風も残っており、久米の狂言との深い関わりが裏付けられる。その久米が舞った『羽衣』が Pound に与えた感銘は大きかったが、『羽衣』は *The Pisan Cantos* に 2 度現れる。Canto 74 で、収容所での窮境をギリシャの英雄 Odysseus と重ねた直後、雌羊の穏やかな目について述べる「声」が示される。その連想で月の精なる羽衣の乙女の妙なる姿が現れ、続き目前のピサの山が泰山に重ねられ、月と共に天空の光を司る太陽の夕暮の光が目の中に広がって混じり合い、この世の楽園 *paradiso terrestre* がこの上なく美しく描かれる。Carroll Terrell の言うように、雌羊に関する言葉を発した人物が、強姦殺人罪で死刑に処せられたのならその悲惨な事実、さらには、雨水で泥土となった地に夜涙する Pound の苦境、これらと想像による楽園が交互に提示される。さらに別の箇所でも、『羽衣』は『熊坂』とともに西洋の野蛮さ、下品さと対立するものとして並置される。また、熊坂は同じ Canto 74 内でさらに、*vulgarity, rascality* と対立する高邁な精神を持つ武士としてその声が示される。*The Protagonist* の特徴、「声」の再現である。ここでは熊坂に加えて景清という源平の二侍と、第二次世界大戦当時の日本兵の訛りの強い声が、時空を超えて並置される。さらに、フィリピン人による「大日本帝国万歳」の「声」が大日本帝国の *rascality* とフィリピンの悲劇を端的に示す。ところが、並置される景清の敵源氏の侍を称えて別れる豪快な笑い声は、逞しく理想的な武士を示し、野蛮な日本兵と対照的である。さらに能『景清』内での景清は、往時の面影もない盲目で乞食同然の老いさらばえた姿で、人生の浮き沈みを象徴し、能の登場人物や、セリフの並置が人生の浮き沈みを提示することに成功している。多くの声が、時空を超えて展開する *The Cantos* の中で、能のイメージが巧みに並置され、*paradiso terrestre* と非情な現実を示す。この現実を受け入れて、*The Pisan Cantos* のキーワード *process* に従い全ては前に進むしかない。まさしく狂言の原理に通じ、また Yeats が “Lapis Lazuli” で描いた中国の老人の gay な姿に見られる tragic joy にも通じる。このように Pound の *The Cantos* は、パウンドの能楽理解に基づいて能楽を提示し、声の再現という手法を用い、パウンド独特の詩学を十二分に展開する場となっている。

Pound は、第二次世界大戦中、自分は若い頃日本の芸術を探究し、理解しているので、文化をキーワードに対日戦争終結への進言ができるとルーズベルトに直訴しようとした。ムッソリーニ支持にしる、ラジオローマでの放送にしる、現実世界での *paradiso terrestre* 実現を目指したのだろうが、芸術作品の力で示せば十分であったのにと残念である。Pound と Yeats が能楽との邂逅で表した劇作品は、能狂言とは異なるが、以上のように本質を捉え、東西の空間を超え、何百年の時を超えて能楽から得たものを作品内に展開させ、人々の心を動かす力があつたのであるから。芸能や祭祀は現在のようなコロナ禍の下、人々に救いや潤いを与えうるにも拘らず、能楽公演は密を生む場として、多大な困難を伴っている。このような現在、100 年前に日本の古典芸能とアメリカ・アイルランドの文学者の邂逅で生まれたものが、現代世界に果たす意義を本発表を通じて考え直す機会となっていればと思う。

